

司式:中川信明
奏楽:堀口恵美

前奏:「いざ我ら聖霊に願わん」(J.G. ヴァルター)

招詞:わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に置く。(エゼ 36:26a)

讃美歌 17「聖なる主の美しさ」

交読詩編 37:23-29

23 主は人の一步一步を定め/御旨にかなう道を備えてくださる。

24 人は倒れても、打ち捨てられるのではない。主がその手をとらえていてくださる。

25 若いときにも老いた今も、わたしは見ていない/主に従う人が捨てられ/子孫がパンを乞うのを。

26 生涯、憐れんで貸し与えた人には/祝福がその子孫に及ぶ。

27 悪を避け、善を行えば/とこしえに、住み続けることができる。

28 主は正義を愛される。主の慈しみに生きる人を見捨てることなく/とこしえに見守り/主に逆らう者の子孫を断たれる。

29 主に従う人は地を継ぎ/いつまでも、そこに住み続ける。

朗読聖書①イザヤ書 40:27-31

◆創造と贖いの神(後半)

27 ヤコブよ、なぜ言うのか/イスラエルよ、なぜ断言するのか/わたしの道は主に隠されている、と/わたしの裁きは神に忘れられた、と。

28 あなたは知らないのか、聞いたことはないのか。主は、とこしえにいます神/地の果てに及ぶすべてのものの造り主。倦むことなく、疲れることなく/その英知は究めがたい。

29 疲れた者に力を与え/勢いを失っている者に大きな力を与えられる。

30 若者も倦み、疲れ、勇士もつまずき倒れようが

31 主に望みをおく人は新たな力を得鷲のように翼を張って上る。走っても弱ることなく、歩いても疲れない。

朗読聖書②ルカによる福音書 8:1-3

◆婦人たち、奉仕する

01 すぐその後、イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら、町や村を巡って旅を続けられた。十二人も一緒だった。

02 悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア、

03 ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた。

祈 禱

イエス・キリストの父なる神さま、聖名を賛美致します。御国を来たらせてください。本日もまた一人ひとりの名前を呼んで、この礼拝堂に招かれ、あるいはライブ配信によって、聖霊降臨節第二主日の礼拝を共に献げる恵みを感謝します。

私たちは先週、^{ペンテコステ}聖霊降臨節の礼拝を共に献げ、改めてあなたから私たちに聖霊を与えられている喜びを分かち合いました。そして去る一週間、聖霊の導きのもとに夫々の道を歩んできましたが、時にあなたから離れ、自分本位の行動に走り、隣人を傷つけ、多くの罪を犯してきました。その罪を懺悔するとともに、御子イエス・キリストの十字架の贖いによって、そ

の罪を赦されている大いなる恵みに改めて感謝いたします。

今日もまた、これから鮎川牧師の口を通して御言葉の取次ぎが為されます。語る鮎川牧師の上に聖霊のお助けを祈ると共に、私たちが心を開いて愛と救いの言葉をしっかりと受け止めることが出来ますよう切に祈り願います。

私たちはいよいよ来週、信濃町教会創立 100 周年の時を迎え、記念礼拝と祝会を献げます。この記念礼拝・祝会には普段教会に来られない教会員の方々も含めて多くの人々が集い、あるいはライブ配信を通して参加して下さることを願います。そしてこの機に改めて、教会の 100 年の歴史に思いを馳せ、今は天に召された先達が、私たちに継承して下さった信仰を改めて確認することが出来ますよう祈り願います。

また本日は2024年度の定期教会総会を予定しております。昨年度の活動方針、決算の承認、教区支区教会議員の選出のほか、宗教法人規則の改定を議することになっております。どうかあなたが真中に立って議事を滞りなく導いてくださいますようお願い致します。

世界の平和と正義の実現のために祈ります。現在も、パレスチナのガザで、ウクライナで戦闘が続き、多くの人々、特に子供たちやお年寄りの命が奪われ、また家や財産を失っている人々が多くおります。どうかそのような人々の命と生活を守り、一日も早く戦争を終わらせて下さいますよう、誰もが安心して暮らせるような正義を実現して下さいますよう祈ります。

東日本大震災および東京電力福島第一原発事故による苦難を負っている方々、今年一月の能登半島地震によって被災され、未だに避難生活を余儀なくされている方々のために祈ります。福島では福島第一原発の廃炉の目途が立たない中、子どもたちの健康被害や汚染処理水の海洋投棄など課題が山積し、彼の地の人々を苦しめ続けています。また能登地方における復興が遅れ自宅に戻れない方々が多数おります。あなたがそのような方々に寄り添い、その苦しみを和らげ、また私たちが細々ながらも支援の活動を続けていけますようお導きをお願いします。

私たちの中にも教会のことを思いながらも、病のため、高齢のため、あるいは家族の介護のため、仕事のために教会に来られない方々がおられます。どうかあなたが、その一人ひとりに寄り添ってくださり、癒しと恵みを与えて下さいますよう切に祈ります。

今日から始まる一週間も私たちがイエス・キリストに従って正しい道を歩んで行くことが出来ますよう聖霊の導きを切に祈り願います。

この祈りをイエス・キリストの聖名を通してお献げ致します。アーメン。

讃美歌:494「ガリラヤの風」

説教:「福音の喜び」

鮎川健一

今朝は聖霊降臨の約束を受けて、神の御力と救いの真実を現した三位一体の主題により、新たな日を迎えています。古代教会では、祈りの対象は父なる神にあり、人々は信仰の自覚において、祈りはキリストをとおし、聖霊の御助けによって祈りました。神学的な三位一体の教説は、信仰により見える文字を超えて顕れます。神は見えざる御手によって御計画を為し、すべてを納めたもう方だからです。

そこで今朝の箇所には聴きましても、この箇所は21節までと、まとまっております。しかしこの中で、四つに分けられます。初めの3節までは、

“主の一行と婦人たちの出会い”から真理を紐解きます。これはルカの構想と神学に基づいています。今朝は非常に短い箇所ですが、書記者ルカは神学的な解釈でこの出来事を綴ります。

まず1節には、「その後、イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら、町や村を巡って旅を続けられた」とあります。同じ記事がマタイ福音書9章にもありますが、主が今までカファルナウムとその周辺を中心にした宣教活動から、さらに拡大している、ということがわかります。特にルカは宇宙的な規模を念頭に、主の御言葉の宣教活動が“広がり”ということに想いを重ねているようです。そこから「イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら(ルカ8:1)」と、このことは如何なることかを考えてみます。マタイは、「御国の福音を宣べ伝え(9:35)」と簡潔な表現をここでしています。二つの表現から、“主の福音とは神の御国のこと”という、原始キリスト教会の信仰の根幹、信条の共通理解が浮かびます。そこで“福音が神の国”であることを考えます。旧約の時代と共に、ユダヤ民族は神に選ばれた「選民」という、この特別な意識を持っていました。しかし主の来臨から神とのつながり、このシンボリックである「油注がれた者」、この表現は、その当時の王、大祭司、預言者などの指導者たちを指しますが、彼らはすべて失ってかなりの時が流れています。当時ユダヤはヘロデ王朝とローマ帝国という異邦人の二重支配下にあって、そして異邦人の権力者におもねる者たちだけが肥え太り、民衆は貧しく病んでいるような、そういった厳しい酷い社会状況でした。ファリサイ派や律法学者たちは、律法に上乘せした禁止条項を口うるさく説くだけで、本来、最も身近な存在であるはずの“主なる神、ヤハウェのことは何も伝わってこない”、というのが実状でした。そこでイスラエル民族の心には、「自分たちは神から見捨てられたか」という“この暗い思い”が充満していました。主は希望を見失った民衆に神の思いを伝えました。しかし具体的なメッセージ「神われらと共にいましたもう、インマヌエル(Εμμανουηλ)」、これはマタイにしか記されず《マタイ:23、参考:イザ7:14、8:8、10(יְהוָה עִמָּנוּ)》、ルカは、多くの苦心を抱くこのユダヤ人の意識を示していません。それは、初めから“神の国から遠い”と思われる異邦人たちに対して、“福音はあなたたちへの招きだ”という、この“深く広い、そのところにある宇宙的規模をもって神の到来を告げている”ということに他なりません。

ルカとマタイの記事は、ここから夫々の方向へ向かいます。マタイはこう続きます。「ありとあらゆる病氣や患いをいやされた。また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。そこで、弟子たちに言われた。『収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい』(9:35-38)。これは、希望を見失ったユダヤの民衆に対して、“羊飼のような責任ある姿勢と主の心ある眼差しを意識したもの”と言えます。またルカは、主イエスに同行した弟子たちと女性たちだけに絞られています(8:1-3)。そこには、この旅の目的の一つに彼らの訓練があるからです。因みに次の『種まきのたとえ』を少し見ますと、主は周囲に大勢いたと思われる中に立って彼らの疑問に答えておられた、ということからも、弟子たちに対する福音を説く姿勢、真剣な眼差しが窺えます。彼らがいつの日か、“神の言葉を担う者として練達した信仰の働き人になって欲しい”、このように願っていたのでしょう。

また唐突に浮上してくる女性たちですが、ルカは彼女たちを出来事を中心に置きます。短い記事ですので、この時の背景を捉えつつ、少々想像を働かせながら、ルカが意識したところに触れてみたいと思います。まず個

人名が記された3人の女性たちです。「七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア」「ヘロデの家令クザの妻ヨハンナ」「スサンナ」、この三人ですが、その中で「スサンナ」については、このみで、詳細は分かりません。しかし、“聖書に名が記されている”ということから、ルカの存命中の当時の教会では、“ああ、あの女性が”と誰しもが思うほどに知られていた人と思われる。他の二人に説明があるのは、“ありふれた名前のために説明が必要だった”と推測できます。因みに「マグダラ」という呼び名はガリラヤ湖西岸にある町を指しますが、その出身の「マリア」のことは福音書中に何度も記されてきています。彼女に関わる出来事もよく知られた女性です。「七つの悪霊を追い出していただいた」というこの説明書きで強調しますが、この「復活の主にお会いした最初の人、このマリア、ヨハネが記した記事(19:25)は圧巻だ」ということも思い起こします。そして、このように強調して記されているわけは、医者ルカの立場から見て、病気の治療方法が見出されない状況にあったところを、“主の御手によって癒された”ということから、理性を失うほど衝撃的な印象を持ったと思われます。それは当時の医療見解や自然科学の途上にある時と場所ですから、医者への施しができない場合、ユダヤ人に限らず古代の人たちが、こういったことは“悪霊に憑かれている”と恐れていました。それをルカは、“ある種の病氣”と診ているところに含蓄があります。現代社会では、不治の病は悪霊の仕業というふうには医学上判断されませんし、素人がそう判断すれば精神的・人間性も疑われかねません。追加で、数字の「7」が出てきていますが、これは完全数です。7つの病氣があったというわけでもなく、その時点で“手の施しようがなかったほどに病が重かった”ということを指します。どういう病氣であったのか、そのことは考えなくても、“それほどまでに苦しんでいた”ということです。完全に病に侵されていて“施しようがなかった”、そういう強調点です。そして、そのマリアが“主によって癒された”、そのことで、当時の教会では“悪霊や病氣を直していただいた女性たち”、その代表格として知れ渡っていたこの「マグダラのマリア」であったと思われます。恐らく、「ヨハンナ」や「スサンナ」もそうした女性たちの一人だったのでしょう。主イエスと12人の弟子たちの一行に、奇怪に思われる女性たちが、この中に加わっていることは、この信仰共同体なる一行が“世間から見放されたような人たち”で構成されていたことが窺えます。また、これから後に世界中に建てられていったキリスト教会に対するルカの報告書とも言えます。

もう一人の「ヘロデの家令クザの妻ヨハンナ」、彼女は恐らく“重い病氣のために苦しんでいた時に主と出会った”、こういった者でしょう。夫の「クザ」が、主にある交わりに加わることを彼女に許したということは、“王宮には既に彼女の居場所がなかった”ことを意味します。誹謗中傷や偏見の眼差しに遭った彼女の生きる場所は、もはや“主イエスの傍にしかなかった”ということです。しかしその病を癒やされた彼女が、この交わりに持ち込んで来たものは、恐らくクザが持たせてくれた“自分の財産”というものでした。この交わりにあった大勢の女性たちは、大半は貧しい一般民衆ですが、「ヨハンナ」のような人もいたということでしょう。「自分の財産をもって」とは、まさにこの後に続く『使徒言行録』に記されたように、「信者となった者たちはみないっしょにいて、一切の物を共有していた(2:44-45)、このことがルカ第二書の世界、初代教会の時代を彷彿とさせるものに私たちを引き込みます。彼女たちは、「彼らに仕える」ために同行していました。彼女たちの祈りが信仰共同体を支え、何よりも主に仕える模範的な姿を、世間の価値観や区別差別を超えて成されたことを証するものです。

聖霊降臨を迎えて、いま私たちが置かれている時と教会歴が備えられていることも重なって、『聖霊行伝』と別名言われる『使徒言行録』に今一度、想いを重ね、ルカの信仰と告白を受け止めます。その使徒言行録の続きには、“人の弱さを思いやり、互いに仕え合い、祈り支え合う。そこに神への賛美、喜びと真心がある(使2:46-47)”ことを伝えます。そして何よりもその中心に“主がおられる”という教会の核の部分を示します。また主が願った弟子たちの訓練は、“主に仕えることとはいかなることか、またその交わりはどうあるものか”、これを弟子たちと共に主がユダヤの地において歩む中で、福音宣教の核心に迫った方向を指し示しました。ルカの目は既にここで、キリストの教会を建て上げる方向を向いています。彼が“神の国を説き、福音を告げ知らせ(ルカ8:1)”と、さらっと言っているのは、神の御国にキリスト教会を重ねているからに他なりません。

“キリスト・イエスの教会”、それは“単なる人の集まりではない”、ということはいわゆるがなですけれど、また“親しい人だから集まる”というのでもありません。むしろ“主によって親しくされ、交わりを通して主の御体なる教会の一人ひとりとして責務を担い、宣教の業に参与する者へと変えられてゆく”ということです。まさに“神の御国に呼び集められた者たちの群れ”、元の言葉では“エクレシア”と言いますが、それが建物以上の“普遍的な公同の『教会』”を意味します。端的には、“信仰共同体が教会”という表現になります。何も建物や制度が教会を絶対的に示すものではありません。更に言うならば、“主の御顔を拝するために新しく創造された世界”です。それはとても“非日常”です。“礼拝そのものが非日常の出来事”とも言えます。まあ、日常の中にありながらの出来事ですから、言い方は色々あるでしょうけれど、この時間そのものが非日常的な時間を迎えています。だからとも言えますけれども、この時間のことを世間的に言われれば、“教会の人は偽善的であり、呑気な人たち”と見られています。また、他人の手助けを言うなら、“こんなことをしていないで外に出て奉仕なさい”、“自己満足的な人たちだ”という意見も茶飯事です。それはそれとしても、教会の根幹を真剣に真実から受け止めるのでなければ、手を休めて、仕事を離れて、日曜日の、この一日を朝から教会に身を置くこと自体が受けとめられませんし、また礼拝の意味がわからなくなります。そうは言っても、ライブ配信や、また夫々の地域、夫々の所で祈りを献げている事実もあります。その人たちが“いけない”というわけではありません。なかなか言葉の上では通じる意味が大変ですが、礼拝の意味、この根幹がどこにあるのかということは、さらには聖餐の恵みを芯から恵みとして受け止める、このことも考えなければなりません。ですから聖餐式が毎週あるかどうかではなく、月に一度、または年に何回かある、その計りよりも、聖餐に与る特別性を主から受けた大いなる恵みとして信仰をもって受けるものです。

既に弟子たちは、その世界を見るために、“訓練の最中”という、このことを今朝の箇所ですべて受け止めました。私たちも、主の御救いに抱かれて受けた洗礼の時を思い起こします。また聖餐に与る毎に、弟子たちが主から受けたものをしっかりと見つめて、宣教の業、信仰の道をこれからも進んでまいりたいと心から願うものです。

祈りを献げます。

慈しみ深き主イエス・キリストの父なる御神さま、新たな歩みの中、祈りと賛美を献げる幸いに感謝します。

平和の主よ、この世の闘いは終わりを告げることがありません。どうか一致と和解をもたらしてください。

命の主よ、どうか罪深い者を赦し、聖め、主の証人として用いてください。

力の主よ、どうか御言葉にあつて、全てがあなたに向けて為されるものでありますように。主に仕えるべく、義しき姿になるべく、真理の道へと導かれますことを願います。

憐れみの主よ、今この時、苦難と悲慘にある者たちにも、あなたが共に居てください、祈りを聴き上げてください。

時を同じくして献げられます祈りに合わせ、尊き主の聖名によって御前にお献げ致します。アーメン。

讃美歌: 409「すくい道」

献金・感謝(長原光)・主の祈り

全地の造り主なる、そしてまた永遠の時を支配してくださる主イエス・キリストの父なる御神さま、今朝は、聖霊降臨節第二主日・三位一体の主日礼拝を、zoomを通して、またこの場にお集め戴いて、共に守ることが許され感謝致します。

本日は牧者を通して、イエスさまの御業と初代教会の歩みに思いを馳せて、御言葉を戴きました。どうか私たちが、今も、生きて働き給う主の聖霊によって、この地上の歩みをイエスさまの御姿に倣って歩むことが出来ますように、どうか導いてください。

ただあなたは私たちの罪をご存じです。私たちは遠くの者には優しく、近い者には厳しい者です。どうかあなたが、そのような私たちの限界を超えて、今も生きて働いてくださいますことをどうかお示してください。どうか私たちにあなたに従う勇気をお与えください。

私たちは豊かに与えられた物を戴いて日々を生活しておりますけれども、今、私たちの献身の徴として感謝をあなたにお献げします。どうかこれを御用のために清めて用いてください。

主がその旅路において私たちに示して下さった主の祈りをもって、この新しい一週間を始めさせてください。「主の祈り」…アーメン。

派遣: 讃美歌 88「心に愛を」

祝福: 主イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しき交わりが、ここから遣わされていくあなたが一同と共に、今も後も永遠にあるように。アーメン。

報告: (1)教会学校: 6/9『花の日』献金の要請 (2)創立 100 周年記念礼拝後の集合写真撮りリハーサルについて (3)定期教会総会資料差し替え案内 (4)次週創立 100 周年記念礼拝に関する注意事項……。

後奏: 「来ませ、造り主なる聖霊の神よ」(J.S.バッハ)